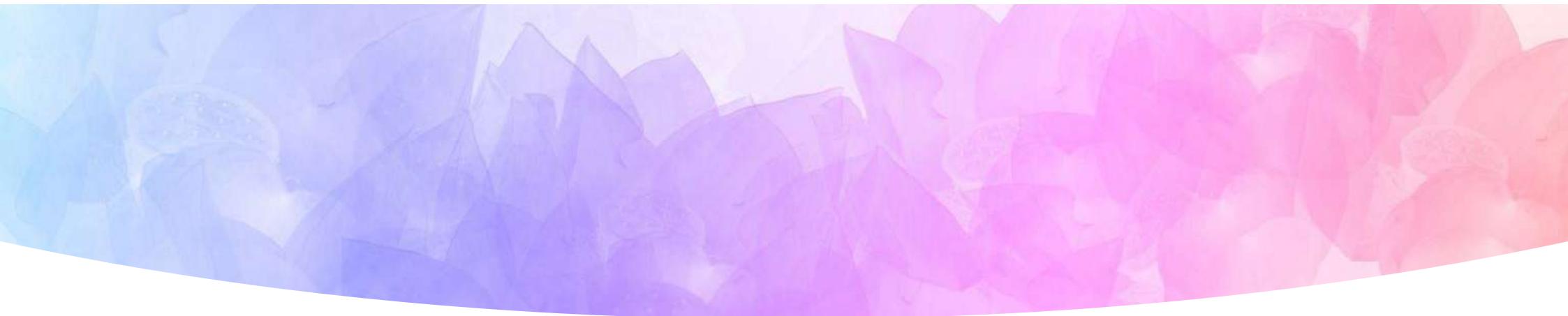




Action Plan (Japanese) 2025 Invitation Programme for Japanese Teachers to China



ACTION PLAN (国際理解教育の推進)

目的:民主的な社会の創り手育成

多様な他者と協働できる「民主的な社会の創り手」を育成する。

背景:多様性の包摶

「内なる国際化」で外国籍児童が増加。「多様な個性や特性、背景を有する子供」に向き合い、「多様性の包摶 (Equity)」の実現が喫緊の課題。

短期 (2025年内)

利用児童への講話やイングリッシュキャラバン等も活用し、「多様な他者と対話や合意を図る取組」のための機運を醸成する。また、派遣から学んだ中国の教育についての伝達研修を教員向けに実施する。

OJT研修で、生成AIを「国際理解を深める道具」として活用し、多様な情報や偏見に対処する教員の基盤スキルを確立する。また、異文化に起因する困難事例について対応策を検討する場を定期的に開催する。

中期 (3ヵ年)

「教科等横断的な視点」で教育課程を見直し、「総合的な学習の時間」を国際理解教育の探究的な学びの中核と位置付ける。国際理解に関する単元を新設できるよう、年間指導計画の見直しを行う。

「World Friends Day」を定期的に企画・実施し、対話と合意形成の機会を定着させる。生成AIを「英会話」や「意見要約」に活用し、「協働的な学びの一体的充実」を試験導入する。

長期 (5-10年後)

中国の小学校との姉妹校提携(5年後)を実現。デジタル学習基盤を活用したオンライン・対面交流を定着させ、「協働的な学び」を実践する。

近隣小・中学校間の国際交流をコーディネートし、地域全体の「異文化間協働活動」を牽引。国際理解教育の推進役として学校の取組を発信することで、「共生社会を実現する基盤」を構築する。

現地で得た学び: 未来を照らす二つの羅針盤

曲 AI技術との共存に必要な柔軟な姿勢

北京開発区での自動運転試乗体験等を通じ、AIが日常生活と切り離せないほど身近な存在になっている現実を強く感じた。この技術普及時代において、子どもたちと共にAIを使いこなし、学びを深めるしなやかな姿勢が教員にも不可欠である。

心 人との対話が育む文化理解

教育に情熱を傾ける人々との「一期一会」の対話を通じ、グローバル化が進む時代において、互いの文化や伝統を大切にする心が国際理解の土台になると確信した。

視察先と主な学び

北京第一実験学校

圧倒的な学校規模と「ラーニングコミュニティ」に基づくキャンパス形態の変化が特徴的。学習課題設計ツールを用いた探究学習において、評価が明確に設計されている点は、日本の教育が目指す「主体的・対話的で深い学び」を具体化する上で、極めて重要な羅針盤となる知見であった。

南開大学附属小学校

音楽・伝統文化教育に注力し、訪問団を伝統芸術で歓迎するなど、国際理解教育に積極的な「開かれた学校」。教育目標は異なっても、現場の先生方や子どもたちからは「一人一人を大切に育てる」という教育者としての普遍的な姿勢が強く感じられた。

北京市月壇中学校

1972年より日本語を第一外国語として教育。高校3年生が流暢な日本語でプレゼンを行うなど、強い親日的な姿勢と国際理解力を示した。わずか数年で高い能力を習得させる成果は、日本の外国語教育のあり方に根本的な見直しを迫るものである。

中華人民共和国教育部

国策として生徒を育成する明確なビジョンと、教育格差是正への強い意志を確認。特に「家庭の責任」を明確化し、毎日1時間の親子時間を推奨するなど、学校任せにせず国民全体の総力で教育を担うという、国家主導の施策の力強さに感銘を受けた。

中国籍子女の受け入れ対応とサポート

【効果的な支援策と具体的な実施方法】：アクションプラン概要

（1）目標とゴール

- ① 生徒募集の課題対応：少子化による生徒募集の困難に対応し、安定的な志願者確保を目指す
- ② 教育需要への対応：東京都文京区の中国籍子女の教育需要に応え「3S1K」からの進学希望者を対象とする
- ③ 学習・生活の定着：入学後90日以内に生活と学習の定着を図り、安心して通学できる環境を作る
- ④ 日本語能力の向上目標：高2時点で教科日本語レベルB2の到達を目標とし、国際教育推進に貢献する

（2）背景と教育需要

- ① 東京都文京区の人気理由：文京区は教育水準の高さと生活環境の良さから外国籍家庭に人気の移住先である
- ② 「3S1K」の役割：区内の誠之小、千駄木小、昭和小、窪町小（3S1K）は中国籍保護者から人気の小学校である
- ③ 中国籍子女の進学傾向：中国籍保護者・子女は所謂「難関進学校」を志望する傾向が強い
- ④ 受入れ体制と支援強化：本校では中国籍子女の受け入れ体制の整備と教育的支援の充実が求められている

主要戦略と実施ポイント

(3) 広報と選抜の工夫

- ① **多言語広報戦略**：中国語特設サイトとSNS活用により、ターゲット層への認知度を効果的に向上させる
- ② **公平な選抜制度**：外国籍枠の設置と日本語負荷調整で、多様な受験生の公平な選抜を実現する
- ③ **保護者支援施策**：中日併記の出願手引きと個別相談会で、保護者の不安軽減と出願意欲向上を図る

(4) 受入れ体制と学習支援

- ① **入学前日本語準備**：オンライン日本語プレップ講座で学校生活言語と教科日本語の基礎を習得させる
- ② **個別教育プラン(IEP)**：JSLアセスメントに基づき、プルアウトとプッシュインで効果的な日本語指導を行う
- ③ **支援スタッフ雇用**：日本語と中国語のコミュニケーションに長けた人材の確保(メンター制によるサポート)
- ④ **初期定着支援**：バディ制度と生活オリエンテーションで入学後90日間の適応を支援する
- ⑤ **学力向上と保護者連携**：ICT活用や放課後学習スペースで学力向上を図り、後援会イベントで保護者連携を強化

能動的な学びのできる「人間力」を備えたグローバルリーダーの育成



グローバルリーダー育成のための統合的国際教育を目指す。

- ①対面・オンライン国際交流を拡大・定着⇒国際事業年間計画との相乗効果
- ②現在のフォーカスは「アジアの国々」⇒交流国の拡大・3か国同時交流
- ③交流内容の充実⇒文化交流・国際交流×理数探究・クロスカリキュラム・SDGs
- ④訪問団の受け入れ・アジアの国を訪問（他校との連携で実現を目指す。）

グローバルリーダー育成のための統合的国際教育を目指す。

4~7月

8~11月

12~3月

オンライン交流・授業での紹介

対面交流

対面交流・レクチャー・講演会・訪問

対面交流・受け入れ

1. 授業での取り組み

- ・今回の訪問の報告（スライド・ビデオ）やアジアの国々の紹介
- ・中国を含むアジア州の学校とオンライン交流

交流内容：文化交流/理数探究のテーマ/SDGsの目標/同一教材を使用し英語で交流

2. 学年行事としての取り組み

- ・中国を含むアジア州の国々の講師によるレクチャーと交流、ディスカッション
レクチャー：各国紹介 ディスカッショントピック：個人理数探究・SDGs
文化交流：民族衣装・楽器等文化体験・歌や踊り・工作

3. 学校行事としての取り組み

- ・講演会：国際的に活躍する講師による講演
- ・対面交流：他校と合同で中国・韓国の学校訪問：共同計画と募集、学校訪問とホームステイ

中国政府日本教職員招へいプログラム 学びを生徒へ還元

【背景】英語への苦手意識、国際交流機会の不足。兵庫県三木市でも外国人住民は増加しているが、生徒との接点は限定的。

【課題】多くの生徒が地元で就職する傾向。英語力以上に、多様な他者と協働する態度が必須。

【目的】探究+国際交流を通じ、多文化共生意識と国際的視野を育成。高大連携事業で中国出身留学生と交流し、多文化共生を「自分事」として捉える意識を醸成する。

事前学習

【設計】英語と総合的な探究の時間の教科横断学習。ルーブリックを事前提示。

- ①フォトランゲージ：中国で撮影した「本物」の写真を使用し、ギャラリーウォークで思考を深める。
- ②ジグソーリーディング：中国出身留学生の英語自己紹介文、中国文化・歴史の長文読解。
- ③問い合わせの探究：「なぜ？」の問い合わせタブレット端末で調べ学習し班で探究シートの完成・発表

座談会

大学から中国出身の留学生5名を招待。事前学習で生まれた「なぜ？」というリアルな問い合わせを、座談会形式で直接質問する。言語的障壁の低い日本語も補足的に活用。

事後学習

事前学習と座談会での学びを班で協働し、成果を英語でプレゼンテーションする。



体感して探究する

令和8年度 年間計画（非英語圏出身者との異文化交流）

1学期

5月 インドネシア
6月 ネパール
7月 中国
●高大連携事業講演会
「異文化コミュニケーションとステレオタイプ」

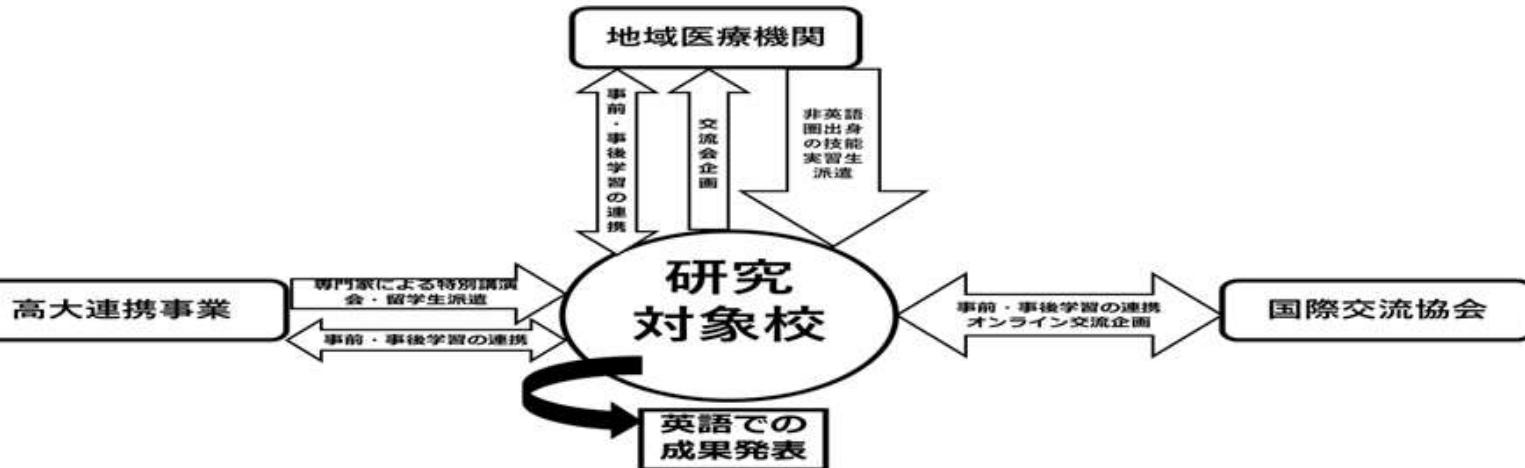
2学期

9月 韓国（オンライン）
10月 ミャンマー
11月 ベトナム
12月 ブラジル
●国際交流講演会
「マイノリティと共生社会」

3学期

1月 学習成果発表会
(グループプレゼンテーション・英語)
@総合的な探究の時間

全体像（フローチャート）



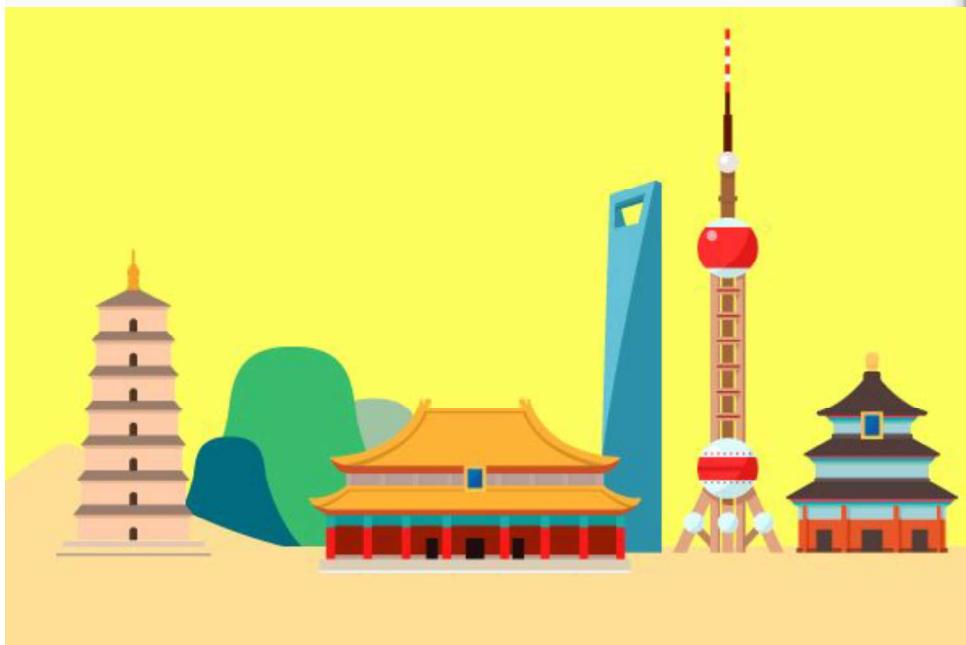
地域コラボ_国際交流祭
2025
座談会
×
オンライン

中国派遣プログラムで学んだことを
今後の教育活動に還元するために
【現在の校内の現状】

国際理解教育が特定の教科や分野に
偏っている

【今後の目標】

教科書の知識のみにとどまらない「生きた教材」を活用し国際理解教育を実施したい



- ・派遣プログラムのまとめ
- ・校内研修での報告
- ・県初任者研修でプログラムの紹介
- ・社会科(地理)アジア州の研究授業

- ・中国とのオンライン交流授業の計画、実施
- ・2026年の派遣参加者との交流
- ・校内の外国ルーツの児童への日本語指導の体制整備

- ・2025～の活動を発表

2025

2026前期

2026後期

2027前期

2027

- ・千葉市教育研究会での実践報告
- ・社会科(地理)身近な地域の調査
- ・教職大学院での実践報告
- ・校内の外国ルーツの児童への日本語指導の体制整備

- ・中国とのオンライン交流授業の計画、実施
- ・交流事業の実践報告



中国招聘プログラム の学び

中国招聘プログラムでは、**世界的な変化に視野を向けられる人材育成**が重要な使命として、三つの核心的な知見を得た。

【相互理解】

中国の方々との直接交流を通じ、人種や国を超えた相互尊重の精神に触れ、抱いていた否定的な感情が払拭された。相互理解には直接人に出会い、思い出を共有することが何よりも重要であることを再認識した。

【歴史的背景】

教育の定義は歴史と共に変化し、未来で活躍する人材育成には過去と未来の両方の視点を養うことが大切であるという深い知見を得た。

【教育的意義】

教育部では、体育やインクルーシブ教育の重要性をトップと現場双方の視点から確認し、共通の課題と日本で行う教育の意義をグローバルな視点で再認識した。



アクションプランの整理

短期計画

本校の生徒を対象に、国際理解教育を実施。**自分の目で確かめる重要性**をテーマに、中国を含む海外の紹介を行う。キャリア教育の視点を重視し、ACCUやJICAなど、世界に目を向ける仕事があることを伝えていく。



中期計画

学校全体で国際理解教育の広がりを促進するために、本校の教員を対象に報告会を実施する。また、他校や国際協力希望者に向けた出張授業を行う。学校連携や姉妹校となる学校を見つけ、交流を行う。



長期計画

連携校との長期的な交流を運営できるようにする。また、自身の海外訪問国を範囲を拡大し、**日本・中国以外の4カ国以上**の教育比較を実施し、日本教育の良さを考え伝える準備を進める。

3年間のロードマップ：段階的アプローチ（生徒）



1年目【知る・疑う】

- ◎ 目標：バイアス解除と興味の喚起
「自分たちが知っている中国と違うぞ？」という驚きを提供し、情報の偏りを自覚させる

- 中国アニメ・ドラマから見る現代中国
『羅小黒戦記』や『魔道祖師』など、日本のアニメとの共通点や、描かれている中国の都市風景（超IT化社会）を見る。

「政治・ニュースの中国」と「若者文化の中国」を切り離し、親近感を持たせる。

- ニュースの裏側を読むワークショップ
日本のニュースと中国のSNS（Weibo等）の情報を比較し、同じ事象がどう伝えられているかを検証する。

SNS上のヘイトや偏見がどのように形成されるかを理解する。（メディアリテラシー）

- 活用：JICA筑波訪問学習
「中国」だけでなく「世界」という広い視点を持つ



2年目【つながる・話す】

- ◎ 目標：オンライン交流と教員の実践力育成
中国訪問で得たコネクションを活用し、オンラインで「顔の見える」交流を行う

- リアル・チャイナ・オンライン
中国の高校生（または日本語を学ぶ大学生）とのオンライン交流。
まずは「好きなアニメ」「推し活」「ゲーム（原神など）」といった共通のエンタメ話題から
「中国人」という記号ではなく、「アニメ好きな〇〇さん」という個人の繋がりを作る。

- 校内イベント「春節祭」など、文化体験
外国にルーツを持つ生徒をリーダーにして、文化体験を行う。

外国ルーツの生徒が「教えてあげる立場（先生役）」になることで本人の自己肯定感を高めるとともに、クラス内のヒエラルキーを解消する。

- 活用：JICA筑波出前授業
JICA海外協力隊経験者を招き、現地での経験や、苦難をどう乗り越えたかを聞く。



3年目【共創する・支える】

- ◎ 目標：生徒主体の活動と校風への定着
生徒自身が多文化共生に向けて「学校をどうしていくか」を考える。

- 探究「那珂湊を多文化共生のまちへ」
「外国にルーツを持つ生徒も日本人の生徒も、誰もが過ごしやすいクラス・地域にするには？」をテーマにした探究学習。

外国語併記の校内マップ作成、翻訳アプリを使った交流マニュアルの作成など、アウトプット

- 日中合同オンライン作品制作
交流相手と共同で、お互いの学校紹介動画や、ショートドラマを作成し、文化祭で発表する

個人と個人の繋がりを、協働するグループのメンバーに発展させる

- 活用：地域のイベント
取り組みを地域で発表し、生徒が「自分たちの学校は地域のために取り組みをしている」という誇りを持つ

アクションプラン（教職員）



那珂湊高校の教室にいる『彼ら』を知る

「他人ごとにしない情報共有」
外国にルーツを持つ生徒のクラス担任や
スクールソーシャルワーカーが講師となり、
一般論ではなく、「今、本校にいる外国にルーツを持つ生徒」が直面している課題（言語、家庭環境、進路）を教職員全体で共有する。

「様々な国への偏見」以前に、目の前の生徒への理解不足を解消する。



外部との協力

「『やさしい日本語』活用講座」
JICEによる研修の活用。外国にルーツを持つ生徒や保護者への連絡において、伝わりやすい日本語（やさしい日本語）への書き換えワークショップを行い、教員側の「言葉が通じない」という苦手意識を払拭する。

オンライン交流ファシリテーション研修
総合的な探究の授業などで同学年外以外の先生にも参加してもらい、海外の学校との持続的なコネクション作りと、オンライン交流時のトラブル対応、話題の振り方等を学ぶ。

アクションを持続的なものにするために、共有と研修を疎かにしない



「進路保障と多文化キャリア教育」

外国にルーツを持つ生徒特有のビザの問題、進学・就職の壁についての専門知識を学ぶ。
JICAや地域のNPOと連携し、卒業後のロールモデル（日本で働く外国人）を招く。

専門学校や大学に進むことで有利な就職ビザ取得ルートが開けることを知り、進路に繋げる

是非

JICAやACCUの「教師海外研修」の活用

教師海外研修に参加して現地の空気を肌で感じ、アクションプラン実行の熱量を持続させる。

アクションプラン1 職員研修を通じての教育観のアップデート

今回の中国派遣から学んだこと

ビジョンの明確化 北京市は最新の教育理論に基づいた教育を行なおうとしている

方法論の共有 最新の教育理論を学んだ教員を揃えている・校内での理論の共有が図られている

目標に向けての実験的試み その上での教育上の「実験」が大規模に行われている

例) 北京第一実験学校(K12)

帰国後のアクション1：職員研修

北京市が目指していることの紹介

自由な発想を有し、それを実現させた経験を多く持つ個人(イノベーション人材)を多く育てる

北京市が採用している理論と方向性についての検討

PBL (Project-based Learning)：課題解決型学習とそれに対する適切な評価を重視

個別最適化：個々の学びと協働的な学びの双方を重視

知徳体のバランスの充実：体力や運動能力と学力との相関関係を重視

ビジネスとの接続を意識する：「市場価値=他者に必要とされる」という視点を重視

期待される職員集団の変化

最新の教育理論に基づく
教育観のアップデート

期待される教育効果（生徒）

主体性や自立心、探究心の育成 深い知識の定着
問題解能力や論理的思考力の向上 コミュニケーション力や社会性の育成

北京市の目指す教育の先進性を紹介し、教職員個々の教育観と教育方法の見直しにつなげる。

アクションプラン2 学校間交流による日中文化交流の深化

今回の中国派遣中に行った交流 天津外国语大学附属外国语学校

高校生同士のオンライン交流 案内を務めてくれた高校生のメッセージを勤務校に送信

書道部の生徒とリアルタイムオンラインでつながり交流

交流に対する反応 日本側 中国側の高校生の日本語力に驚嘆する

中国側 日本の高校生が中国の古典を手本として書道を学んでいることに驚く

自国に対する相手からの視点に気づいた



帰国後のアクション2：高校生ならではの文化交流

日本の状況 日本の高校における書道教育では中国の古典に学ぶことが大変に重視されている

中国の状況 日本文化に興味を持つ中国の高校生にとって、日本文化の入り口はアニメやボーカロイドなどの日本の高校生にもなじみの深いポップカルチャーである

互いに相手の興味や関心に応える形で自国の文化を紹介することができる



期待される教育効果

日中双方の高校生が自国の文化に対する国外からの肯定的評価を知り、自国の文化を見直す機会を得る
相手国の高校生との交流を通して異文化理解を深め、友好関係の礎を築くことができる

高校生同士の文化交流により、互いに相手の文化をより深く知り友好関係を深める
近隣大学の留学生との対面交流につなげ、より相互理解を深められる

中国招聘プログラム

中国現地で得た
経験と学び

教育目標に即した実践と歴史的背景と近代化された教育

中国では、「質の高い教育」と「総合的な人材育成」で**資質教育や双減対策、格差是正を推進**している。教育の機会均等を図るため、農村地域や都市部の格差を縮小する取り組みも進められている。中国の未来を担う若者たちにとって、より良い学習環境を提供し、学びの中で多様なスキルを身につけていくことで、社会での即戦力として活躍できるようになることが分かった。とくに、北京第一実験学校の教員の平均年齢は、27.7歳で教育のエネルギーや探究心、新しい心を持っている新卒者を募集して採用している。人材育成に関して学校裁量で独自の方針や運営方法を実施できる自由度の高さに感心した。

日本では、**主体性・創造性育成、GIGAスクール構想、探求学習、不登校支援**などに力を入れている。これにより、多様なニーズを持つ学生たちがそれらの道を見つけ、個々の才能を伸ばすチャンスが提供されている。さらに、日本の教育では、グローバル社会で必要とされるスキルの習得を重視しており、異文化理解やコミュニケーション能力の向上を図っている。しかし、**語学に関しては、まだまだ課題が残されている**と感じる。**語学力向上のためのカリキュラム改革や、実践的なコミュニケーション能力を高めるプログラムの導入**が必須だと感じる。日本の教育の強みとして、倫理観や協調性を重んじる点が挙げられるが、急速に変化する社会情勢に対応するためには、これらに加えて**柔軟な思考力や問題解決能力を鍛える教育の重要性が必須**だと学校を視察して感じた。

中国と日本の教育システムには、それぞれの特徴と課題があるが、互いに学び合い、補完し合うことで、より優れた教育環境を構築できる可能性があり、豊かな学びを提供するための知見を得た。

今後行いたい取り組みについて

今回の研修プログラムを通して、中国と日本は、国が抱える教育課題が似ているということを知ることができた。直面する課題に対するアプローチが似ているからこそ相互理解を深め、交流していくことが必要であると考える。



①児童対象（総合的な学習の時間、音楽科、図画工作科、家庭科）

- ・中国への興味を引き出す授業の実施（多文化週間にからめて）
 - 訪れた学校と学生の様子を紹介
 - 中国のことばや文字を使った活動（あいさつ、歌など）
(月壇中学校で披露していただいた流行の歌を日中のことばで)
 - 中国文化体験（漢服試着、楽器(揚琴、琵琶、二胡など)）
 - 南開小学校で学んだ中国の漆をつかったうちわの制作活動
 - 日中の食文化の理解を深め、調理実習

②教員対象

- ・プログラムで学んだ内容の共有
 - 校内・校外での研修会の実施
(中国政府招へい事業の紹介、中国の文化・教育事情について
→ワークショップ
(中国文化体験（漢服、楽器、食等）)



④地域に向けて

- ・報告会を実施
 - 地域の方々が中国の教育を知る機会をつくる
 - 多国間協働の重要性について考える

- ・中国の小学校とオンライン交流
 - 学校紹介や行事の紹介
 - よりよい学校づくりを共に考える

③教員間交流

- ・お互い連絡を取り合える関係の継続
 - メールやSNSでの中国の先生との交流の継続

⑤わたし自身

- ・交流のためのスケジュール調整
- ・懇親会で連絡先を交換した先生と連絡
- ・日本語指導のために中国語の勉強
- ・中国籍、中国にルーツがある保護者との交流
- ・スクールビザの受け入れに向けた調整

アクションプラン

背景、目的、スケジュールなど

背景

- ①本校は、外国にルーツをもつ生徒が増加している。
- ②不登校生徒が増えている。（家庭環境、学習、対人関係など理由は様々）

目的

- ①中国の教育事情を知ることで、互いに過ごしやすい環境を作る。
- ②不登校生徒に対して、中国から学んだ支援方法を生かす。

スケジュール

- ①本年度中にⅠ生徒に授業、Ⅱ教員研修を行う。
- ②相談室のⅢ環境整備を行う。（3年計画）

アクションプラン

取組の具体、実施方法など



I 生徒に授業をする
中国で学んだことを伝える
国際理解・国際協力で必要なことを考える



II 教員研修
中国で学んだことを伝える
具体的な支援方法を全職員で考える



III 環境整備
不登校生徒が通いやすい環境を整えていく（ピアノ、ギター、卓球台、ミシンなどの購入など）

帰国後の具体的アクションプラン

▣ 教育実践への応用

ICT活用による授業の質的転換

中国のAI教育事例を参考に、個別最適化された学習支援を導入する。学習指導要領を遵守しつつも、単なる知識伝達ではなく、ICTを活用して児童生徒の探究心を刺激する授業デザインを構築する。

▣ 共有と発信

組織的な知見の還元

校内研修や職員会議で視察報告を行い、教職員の意識改革を促す。さらに、地域の教育研究会や愛知海外子女教育研究会を通じて知見を広く発信し、地域全体の教育力向上に寄与する。

▣ 国際理解教育の推進

実体験に基づく異文化理解

現地での一次情報を教材化し、ステレオタイプを払拭する授業を展開する。オンラインツールを活用して日中の教室を直接つなぎ、生徒同士が対話を通じて相互理解を深める機会を創出する。

∞ 繼続的な学び

ネットワークの維持と発展

プログラムで構築した人的ネットワークを維持し、中国の最新教育動向を継続的にモニタリングする。一過性の視察に終わらせず、持続可能な教育交流のプラットフォーム構築を目指す。

計画の概要と実施フレームワーク

▣ 背景

中国における教育の急速なデジタル化、AI活用の浸透、および教職員の働き方に対する合理的なアプローチを視察。これらの先進的な取り組みと、日本の教育現場が抱える課題(DXの遅れ、多忙化、グローバル化への対応)との間にあるギャップを埋める必要性を強く認識した。

◎ 目的

視察で得た知見を還元し、ICTを効果的に活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する。同時に、児童生徒及び教職員の異文化受容力を高め、学校全体の国際化と教育の質的向上を図ることを目的とする。

▣ 実施時期

- ・ **フェーズ1(帰国後～3ヶ月)**: 報告会の実施、授業プランの作成、校内ICT環境の再点検。
- ・ **フェーズ2(4ヶ月～1年)**: モデル授業の実践、他校との連携開始、成果の検証。
- ・ **フェーズ3(次年度以降)**: 取り組みの定着化、継続的な交流プログラムの確立。

◎ 実施方法

トップダウンではなく、教科部会や学年団単位での「スマールスタート」を徹底する。まずは自身の授業での実践と公開を行い、具体的な成果(児童の変容)を示すことで、周囲の教職員を巻き込みながら段階的に学校全体へ波及させる手法をとる。

小・中学校段階での「異文化間協働活動」の推進

広島県では、平成26年度より「学びの変革アクション・プラン」を展開しており、施策の3つ目として異文化間協働活動の推進を挙げている。しかし、所属自治体での「異文化間協働活動」が活発に推進されているとは言い難い現状がある。今回の視察により、児童・教職員がアジア諸国の教職員と異文化交流する意義を強く感じた。10年後を目指し、小・中学校段階での「異文化間協働活動」を推進するアクション・プランを計画する。

〈5年間のアクションプラン〉

区分	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度	令和12年度
取組 ①	受入校としてプログラムに参加			校長会・教頭会で他校にも広げる	
取組 ②		中国の学校と姉妹校締結のアクション		姉妹校とオンライン交流を定期的に行う	

現 状

- ネイティブALTとの交流のみで、「異文化間協働活動」が不足
- 姉妹校を設定しておらず、定期的な交流の機会の不足

5年後の目指す姿

- OACCU主催のアジア諸国教職員招聘プログラムの受入校として児童・教職員がアジア諸国の教職員と交流を行う
- アジア諸国において姉妹校交流プログラムを創設し、定期的に児童同士、教師同士のオンライン等を使った交流を行う

10年後の目指す姿

- 所属校のみならず、各学校において「異文化間協働活動」が活発に行われ、小・中学校段階で外国人に対し、地域や観光地において毎年100人以上の児童が案内を行ったり、グローバル・キャンプに参加したりしている。

「実感を伴う『学び』」と「学習評価」の在り方

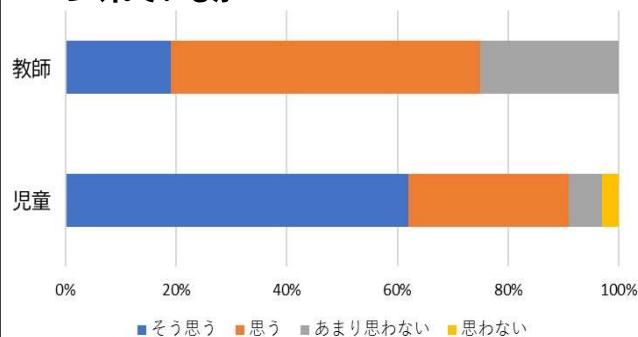
現状の課題・背景

「深い学び」に到達しないのは、
実感を伴う「学び」の不足が考え
られる。

根本原因の分析

- ・各教科の見方・考え方を実感できる「学び」に対する教師の理解不足と教材研究の甘さが考えられる。
- ・各教科の評価の見取りが「学び」につながる適切なものになっていない。

各教科の見方・考え方を実感できる「学び」が つくれているか



学校評価アンケート（2025年版）

中国の第一実験学校での「実感を伴う学び」のための教科横断的な授業づくりは大変参考になった。所属校でも「深い学び」を目指しているが、「主体的」「対話的」を意識することで終わっている。児童に各教科の見方・考え方を実感できる教材開発と、「深い学び」にまで至る授業システムのアクション・プランを計画する。それと共に、第一実験学校の「学習評価」では、「協働的な学び」の具体的な評価方法も聞くことが出来き、大変参考になった。所属校独自の「協働的な学び」の評価の運営実施までのアクション・プランも計画する。

- ・**選択できる授業づくりとアウトプット重視の協働的な学びの充実**
- ・**3観点評価の見取りを適切に行うループリックづくり**

現状

○「個別最適な学び」の充実を目指し、「単元内自由進度学習」の研究を行っているが、「協働的な学び」はほとんど行われず“孤立した学び”となっている。

○業者テストである「単元末テスト」と授業における成果物で評価を行っているが、テストの点数が大きく成績に影響しており、成果物等の見取りは担任の裁量に任されている。

2年後の姿

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的推進を目指した所属校の授業モデルを公開するための「公開研究会」を全県に向けて行っていく。また、校長会または自治体の有志で「授業づくり研究会」を立ち上げ、「実感を伴う授業づくり」を全県に広げる動きを作っていく。

○児童の学習に即した教科テストの在り方を共通意識をもつ。それに伴い、評価の3つの観点の見取りを「教科の成績」+「自主学習」+「協働性」で行うためのループリックを作成する。

5年後の姿

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的推進を目指した所属校の授業モデルを公開するための「公開研究会」を全県に向けて行っていく。また、校長会または自治体の有志で「授業づくり研究会」を立ち上げ、「実感を伴う授業づくり」を全県に広げる動きを作っていく。

○教務主任を中心に、評価作成委員会を立ち上げ、年度ごとに「学習評価」が不適ないようにPDCAサイクルで「評価の在り方」を校内で定着させる。それに伴い、公開研究会でも「評価の在り方」を提言し続ける。

中国招聘プログラムへの参加を通して



国際理解教育の推進

目的

国際理解教育を通して日本と中国の相互理解を深める。

背景

日本と中国の両国関係の冷え込み。
中国へ親近感を抱く人の割合の低迷。

取組	短期計画	中期計画	長期計画
児童に向けて	中国招聘プログラムに参加して、学んだことや訪問校の様子、日本と中国の違いやそれぞれの良さを紹介するパワーポイントを作成する。それを活用して、勤務先の児童に授業を行う。	低中高学年の児童の実態に合わせた内容で作成し直す。 小学4年国語「くらしの中の和と洋」では、中国の衣食住、5年国語「漢字の成り立ち」では、日本と中国の漢字の違いを紹介する授業を実施する。	勤務校と中国で訪問した学校をオンラインで繋いで、お互いの文化や学校を紹介したり、クイズを出し合ったりする交流プログラムを立ち上げる。
教職員に向けて	中国の教育施設や北京第一実験学校で行われている探究的な学習、iFLYTEKが作り出す音声入力やAI技術など教育現場で活用できるICT機器などを紹介する報告研修実施する。	中国から来日する児童が増加していることから、担任と児童、保護者をつなぐ役割を担う。トラブルが起こった際に一緒に対応するなど、児童や保護者が日本に慣れるのをサポートする。	中国から来日する児童は、勤務先だけでなく大阪市のどの学校でも増加している。そこで、中央区や他の区などでも中国への理解を深める研修を行い、相互理解発展に貢献する。
自分自身	自分自身、中国を訪問する前と後では、中国に対する印象が大きく変化した。ニュースやSNSからの情報では得られないことをたくさん吸収した。行かないとわからないことがあった。継続して中国に対する情報をキャッチし続ける。	その国の言葉を理解する、話すことができるということは、国際交流を実施する上で重要なことを痛感した。そこで、中国語を学び、簡単な会話ができるようになる。	中国をはじめ、韓国やベトナムなどルーツをもつ児童の国に対する学びを深める。 文化を知る、言語を学ぶ。 学んだことを他の教職員や児童に還元していく。国際理解教育に携わり続ける。

研修からの学び

先進的な学習環境

北京第一実験学校や月壇中学校では、多様な学びを支える設備や外国語教育が体系的に整備されていた。それぞれの学習環境は、生徒の主体性を効果的に高めていた。

国際性と多様な視点

現地の生徒は非常に国際的な視野を持ち、日本への関心も高く好意的だった。直接交流することで、メディアのイメージとは異なる柔軟な視点に触れることができた。

競争と楽しむ学びの両立

高い受験競争がありつつも、授業は明るく協働的だった。「成績のため」だけでなく「協働して力が伸びる」という文化が根付いており、競争と楽しさが共存していた。

歴史と教育のつながり

街並みや歴史的な建造物に触れ、教育制度が長い歴史や文化の延長線上にあると実感した。「背景を知ること」こそが国際理解教育の本質であるという気づきを得た。

アクションプラン

期間	方針	実施内容
短期 (1年)	共有・可視化	校内報告会の実施 授業内での体験共有・映像紹介
中期 (2~3年)	継続・交流の 仕組み化	本校で主催している英語プレゼン大会への招待 本校SSHの特色を生かした探究テーマの共同化 英語授業での異文化紹介などを通した交流学習
長期 (4年~)	学校間連携の 発展	教員間ネットワーク形成 合同英語授業の実施 中高一貫校として同タイプ校との継続的交流・提携

【活動テーマ】

国際理解教育を通して、互いを認め合い、学び合う学校づくり

【背景】

本校では外国にルーツをもつ児童が全校児童の1割を超える、日本語が十分でない外国人児童の編入も多い。人権教育年間指導計画を立てて外国人教育・国際理解教育にも取り組んでいるが、教科に関連した取り組みが多いため、外国にルーツのある児童が同じクラスにいるにもかかわらず、相互理解に至っていない。

今回のプログラムを通して、中国のことを知れば知るほど自身が日本や中国の教育、歴史について知らないことが多いことに気付き、「自国や他国についての理解を深めたい」という気持ちを強く抱いた。人と人との交流、相手のことを知ることが「もっと学びたい」という学びの原動力となり、相互理解こそが平和で持続可能な社会の実現につながると改めて感じた。日本の学校現場でも、外国にルーツを持つ児童が増える中で、教職員がグローバルな視点を持ち、相互理解を促進する教育を進める必要があると感じた。

【目的】

児童一人ひとりの文化的背景を尊重し、ちがいやよさを認め合える集団を育成する。

教職員自身が多様性や国際性について学び、グローバルな視点から外国にルーツのある児童の理解を深める。

国際理解教育を通して、児童・教職員が「違いを力に変える学び」を実現する。

【取組の具体とスケジュール】

2 学期

- ・校内・校外での研修で
中国派遣の報告・共有

3 学期

- ・外国の文化・言葉・食などを紹介
- ・外国人教育の取り組みの共有

来年度～

- ・国内外の教職員との連携
- ・外国人教育年間指導計画の見直し

【実施方法】

中国派遣で学んだ教育事情、
学校設備、文化や歴史を報
告・共有し、教職員の中国に
についての理解を深めるため、
学校内外で研修を行う。

日本語教室に通う児童が中心
となって、日本語教室での学習
や日本語を学ぶ上で困難なこと、
また自分たちの国（海外）の学
校や食文化を紹介するビデオを
作成する。
各学年の外国人教育の取り組
みを共有し、課題を考える。

前年度の外国人教育の課題
から、児童が自分の身近なこ
ととして日本や世界の文化を
学べるように、学校・学年の
実態に合った「交流」を中心
とした年間指導計画を作成
する。

小学校「総合的な学習の時間」探求型学習異文化理解アクションプラン

中国訪問を活かして、本校の総合的な学習の時間のカリキュラムを見直し、異文化交流の活動等を取り入れることで国際社会で活躍する人材の育成につなげる。

単元名

「世界とつながるわたしたち ～異文化を知り、伝え、行動する～ 『中国を知ろう・つながろう』(10～15時間)」

単元のねらい

■ 知識・理解

世界には多様な文化・生活・価値観があることに気付く。

異文化理解は平和な社会づくりにつながることを知る。

■ 思考・判断・表現

異文化に関する情報を比較したり整理したりしながら、自分の考えをまとめる。

異文化理解の大切さについて自他に伝える方法を工夫する。

■ 関心・意欲・態度異文化の人々に興味を持ち、尊重しようとする姿勢を育む。

自分と他者を大切にしながら行動しようとする態度を身に付ける。

学習目標

- 中国の生活・文化・歴史の多様性に気付き、日本との共通点・違いを理解する。中国について自ら問い合わせ、調べ、比較し、自分の考えとしてまとめ、発信する。
- 中国の人々への関心と敬意を持ち、文化のちがいを認め合う態度を育てる。

学習のスタイル：探求的な学習プロセス（課題の設定 → 情報収集 → キンメ → 登信 → 堀い返り）

3~6年 異文化理解(中国文化)スパイラル・カリキュラム

3年

興味・関心をもつ
(導入・体験)

中国の文化に楽しく触れ、
興味と親しみを持つ。
日本とのちがい・似ていると
ころに気付く。

4年

比較して理解を広げる
(生活・地域)

中国の生活・地理・行事の多様性
に気付く。
日本との比較を通して理解を深
める。

5年

理由を探究し、文化の背景
を理解する(深まり)

中国の文化の背景にある「歴史・地
理・気候・社会」を関連づけて考
える。
自分で問い合わせ、情報を集め、ま
とめる探究の形を確立する。

6年

多文化共生・国際理解へ
(価値・実践)

「中国の多様性・民族、言語、地域差の
理解
日本と中国の関係(交流・貿易・観光・
歴史的つながり)
日本にいる中国ルーツの人の生活(多
文化共生)
外国人人が暮らしやすい地域を考
える。

学年横断で意識する共通スキル

	情報収集	思考整理	表現
3年	写真・本・動画を見 て気づいたことを 書く	似ているところ と、違うところに 気付く	絵や文で短い紹介 カードを作る
4年	複数資料から比較 する	理由を考える	比較したグラフや チャートなどを用い る
5年	信頼性や背景を意 識する	背景やつながり を考える	ICTを活用し、探究 レポートやスライド を作成する
6年	多角的・社会的な 視点で情報を扱う	課題解決につな げる	社会的発信をする。 (他の学校・地域 へ)

単元計画(5・6年)

時間	探求段階	活動内容(中国)
1	課題の設定	中国文化の導入、中国に関する問い合わせ
2	計画立案	調べたい中国のテーマ決定、探究(学習)計画づくり
3-5(2)	情報収集	本・映像・ICT・インタビューで中国について調べ学習
6-7	整理・比較	日本との比較、中国の多様性の整理
8-10	まとめ	ポスター・スライド・動画づくり
11-12	発信	「中国文化フェス」発表会
13	振り返り	学びのまとめ・アクション宣言

目的

○知見の地域還元と教育質向上

中国訪問での経験を活かし、鹿児島県の教育現場における課題を解決するために尽力する。

○AI技術と国際理解教育推進

AIを活用した教育の導入と国際理解教育を推進し、未来の人材育成を図る。

○文化交流と多様性理解促進

文化交流を通じて生徒の視野を広げ、多様性への理解を深める。

短期計画（1年以内）

○教職員への知見共有

校内報告会でAI採点技術と教育格差是正策を紹介する。中国の教育理念も共有し理解を深める。

○AI技術の試験導入

中期的に音声認識や自動採点ツールを活用し、発音評価を行う。英語科のスピーキング練習を支援する。

○国際理解教育の推進

中国の教育理念や文化体験を授業に取り入れ、異文化理解を促進する。

中期計画（2～3年以内）

○教職員研修の実施

AI教育や国際教育に関する教員研修を企画・実施し教員の専門性向上を支援する。

○AI技術を活用した評価開発

AI技術を活用した学習評価方法を開発し、教育の質向上を目指す取り組みを行う。

○姉妹校と交流促進

中国の学校と姉妹校交流を検討し、オンラインで文化理解の動機づけを図る。

長期計画（5年以内）

○離島・僻地でのAI活用

鹿児島県の離島・僻地でのAI教育活用の成果をまとめ、全国に発信する。

○アジア諸国との教育交流

中国などアジア諸国と教育交流を行い、国際理解教育のモデルを構築する。

中国政府日本教職員招聘プログラムでの学び

①学習環境の充実

＜日本も中等教育への投資を急ぐべき!＞

北京第一実験学校では、授業の形態や目的、子どもの年齢や個性に応じて、ペア・グループ学習、個人学習、屋外体験学習、手作り科学観察、パフォーマンスなど、多様な学習を可能にする設備が整備されていた。3Dプリンターやメーカースペースは、探究的な学習や実験にも積極的に活用されている。



②国際理解教育の重要性

＜若い世代だから話せること＞

現地の高校生に「若い世代は日本についてどう思っているか?」を尋ねると、「歴史問題の印象が強い祖父母の世代と違い、日本のことを悪く思っていない人が多い」と語った。両国に関する暗いニュースが多い今だからこそ、同世代の中国人と交流して、等身大の彼らを知るべきだ。



③教職員の負担軽減

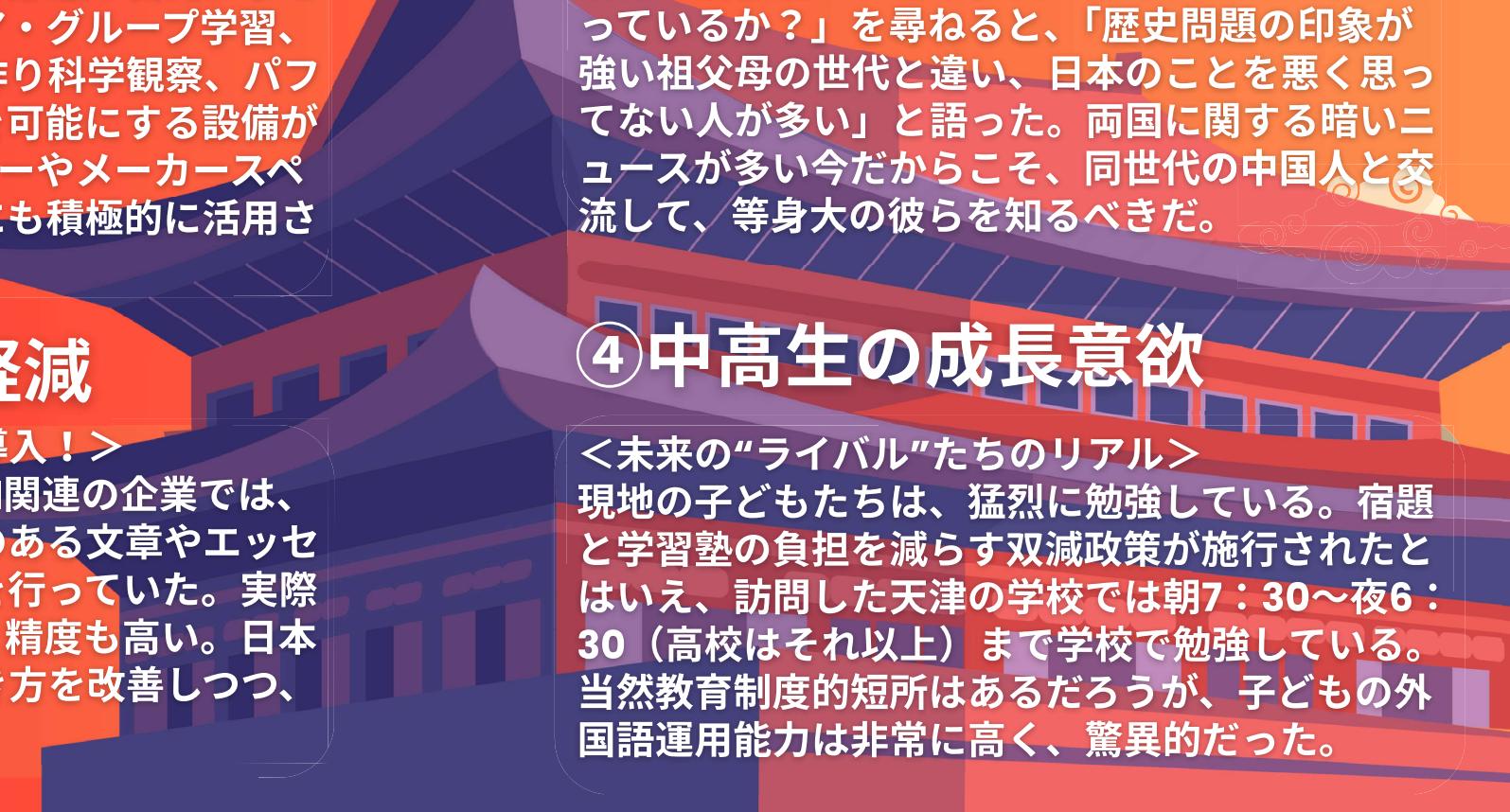
＜最新技術を教育現場へ積極導入!＞

iFLYTEK（科大讯飞）というAI関連の企業では、児童・生徒が書いたまとまりのある文章やエッセイの自動添削システムの開発を行っていた。実際に学校現場に導入されており、精度も高い。日本に導入されれば、教職員の働き方を改善しつつ、言語活動の充実が期待できる。

④中高生の成長意欲

＜未来の“ライバル”たちのリアル＞

現地の子どもたちは、猛烈に勉強している。宿題と学習塾の負担を減らす双減政策が施行されたとはいえ、訪問した天津の学校では朝7:30～夜6:30（高校はそれ以上）まで学校で勉強している。当然教育制度的短所はあるだろうが、子どもの外国語運用能力は非常に高く、驚異的だった。



アクションプラン



短期計画

今年度中に、所属学年の生徒・職員に対して成果報告を行う。また、担当する総合英語かLHRの授業内で、実際に中国の高校生とオンライン交流の機会を持つ。将来の夢、勉強、趣味、お互いの国についての印象などについて日本語や英語で話す。

中期計画

来年度以降、中国の高校生に本校が主催する**国際会議**へオンラインで参加を依頼する。国際会議のテーマは毎年変わるが、それまでに両国で社会的な課題の解決に向けた取り組みや科学的な実験などを行い、会議当日はその成果について発表・質疑応答などを行いながら、より良い社会を作るための意見交換も行う。



長期計画

数年間のオンライン交流を通して信頼関係を構築した後、隔年で5~7日程度、お互いの国で**短期研修**を行い、相互にホームステイ先を提供し合う。ホストファミリーの生徒と一緒に授業や部活動に参加したり、県内の文化施設や文化遺産の見学も行う。最終的には2校目の姉妹校締結を行いたい。

本校はSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）の採択を目指しているが、学校運営や教育課題について教職員同士の**意見交換**も行いたい。



地理の授業

私は専門が地理の教員である。

地理の授業を通じて、中国での見聞を生徒に伝える。

生徒を飽きさせないために、現地で撮影した動画や写真を用いて、クイズ形式にして生徒の参加を促していく。

ねらい：体験談を通じて、中国に対して偏見や先入観をなくす。

実施時期：中国は変化の激しい国である。中国での体験談を授業で伝える期限は短い。可能な限り早めに実施する。



模擬国連

私は模擬国連部の顧問を務めている。私が勤める学校の模擬国連部と北京の月壇中学校とでオンライン模擬国連を実施したい。

【ルール】 使用言語：中国語・日本語

議題：戦争におけるAIの是非

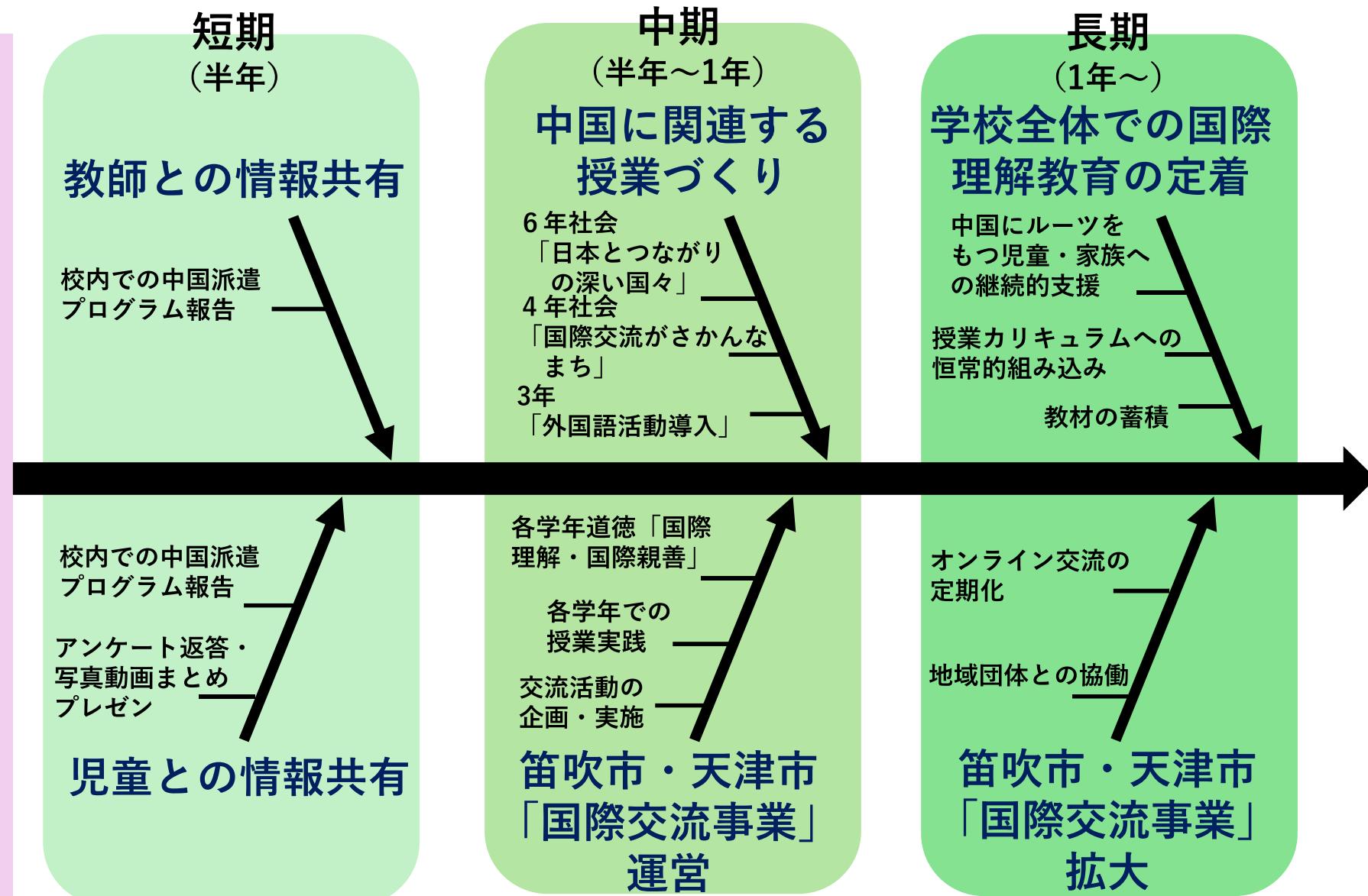
形式：特別委員会形式

ねらい：(中国)日本語能力の向上

(日本)常任理事国(中国)の視点を理解する

実施時期：2026年

背景
中国教育視察を通じて得た経験と学び



中国教職員招へいプログラムで得た学び

◆教育観の違いから学び

- ・ 中国：社会のために貢献する人材育成（徳・智・体・美・労）、家庭・学校・社会が一体
- ・ 日本：個の尊重・人格の完成を重視

→歴史・文化の背景を理解する姿勢が国際理解の出発点

◆国際理解・交流の価値

- ・ “直接会うこと”で偏見が解消され、相互理解が加速
- ・ 生徒の発信力が高く、交流に積極的

→ 交流は経験ベースでの学びの源泉。継続可能な仕組みが必要

◆生徒の学びの姿勢と文化的背景

- ・ 中国：競争環境が強く、学習意欲
- ・ 外国語学習の熱量が高い
日本：多様な学び方や個別最適が強み

→ “学習文化の違い”を理解することが、日本の自律的学び強化につながる

◆歴史・文化に根差した学びの力

- ・ 世界遺産・文化遺産に触れ、リアルから深い理解が生まれる
- ・ 自文化を相対化し、日本のよさも再発見

→ “本物に触れる”体験は教科書を超える学びを生む

アクションプラン

短（1年）

〈知る・共有する段階〉

校内報告会の実施（教職員・児童）

360度カメラのデータをVRゴーグルで視聴

ビデオレター／手紙を使った“低負担交流”の開始

中期（2～3年）

〈つながる・定着させる段階〉

中国の学校とのオンライン交流を定期化

年間指導計画に「異文化理解・国際交流」を明確に位置づけ

多文化共生・国際理解の教科横断カリキュラムの構築

長期（4～5年～）

〈広げる・発展させる段階〉

姉妹校の正式締結や対面交流の実現

国際理解教育・探究学習の学校モデル化（研究発表・公開授業）

教員の学びの継続（海外研修・国際ネットワークへの参加）

中国教職員招聘プログラム

アクションプラン2025

【プログラムでの学び】

- ・中国の先進的な技術開発の力！
- ・先進的で大胆な教育実践！
- ・素晴らしい文化と歴史！

【伝えたい相手】

- ・学校の児童
- ・教職員
- ・広く一般

【手法】

- ・報告会
- ・授業実践
- ・教材開発

短期計画 (帰国後)	中期計画 (～25年度内)	長期計画 (2026年度)
<ul style="list-style-type: none">・中国派遣の報告会を行う (職員、児童向け)	<ul style="list-style-type: none">・教材開発 「生活の中にある中国」をテーマとした沖縄と中国のつながりがわかるカード型の教材を作成する。	<ul style="list-style-type: none">・カードを使った国際理解教育の授業実践を行う

中国への理解を
深める

両国の文化側面
から見たつながりへの気づき

基礎教育教職員訪中団での学びとアクションプラン

訪中前イメージ

- ・詰め込み教育
- ・過大な受験(高考)圧力
- ・日本への無関心

現地の先生から伺った実践

訪中

- ・日常生活に関連した実験を多く取り入れている(物理教員)
- ・探究テーマ別の異年齢講座を開設し、自分で選択できるようにしている(数学教員)
- ・総合実践活動(探究)にて、専門レベルの学問に触れるきっかけを作っている(校長)
- ・日本に関心をもつ生徒が、日本語の授業以外(音楽など)でも、日本語に触れる機会を設けている(日本語教員)

「生徒の興味関心を育てたい」という思いは、日中で同じ!

アクションプラン

日中で協力して、生徒がワクワクする取り組みをしたい！

具体的な取り組み

短期(2025年度)

中期(2026~7年度)

長期(2028年度~)

授業研究

- ・授業見学(教科、総合実践活動)
- ・教材や授業案の共有
- ・カリキュラムの意見交換

- ・授業案の共同作成と実践
- ・総合における基礎技能の教育
- カリキュラム、教材の共有

- ・同じ授業案での実践結果比較の共同研究、国際学会発表
- ・カリキュラム、教材の全国提言

生徒交流

- ・第二外国語での中国語選択生徒や、希望生徒による交流(ビデオ作成・オンライン交流)

- ・希望生徒による学校訪問、交流
- ・総合における交流(合同発表会、共同研究など)

- ・全校生徒が関わる交流(学校訪問、オンライン交流)
- ・第二外国語授業における交流のカリキュラム化(オンライン授業)

その他

- ・異年齢集団での学びあいが実現できる校舎デザインの視察

- ・教員同士の交流の拡大(授業、総合、校務、将来構想)

- ・共同行事の実施と制度化(仮想空間交流、教員共同研修)